『語学教育研究論叢』第 34 号

二種類の能格構文の派生関係を巡って
—“手绢哭湿了”“张三累倒了”をタイプに

李　鹏

On Two Types of Ergative Construction Transformations in Mandarin with Special Reference to “Shoujuan kushi le” VS “Zhangsan leidao le”

LI Peng

【内容提要】

本文在介绍先行研究的基础上，通过影山太郎（1996）的脱使役化和反使役化这两个概念来对汉语中两种不同的作格结构加以说明，其结果显示表层作格结构其实就是他动词的脱使役化作用的结果，而反使役化作用的结果就是所谓的深层作格。同时我们还注意到，两者对应的他动词结构在话题化和被定语从句修饰的焦点化这两个方面有所不同，表层作格对应的他动词结构中的宾语成分可以，而深层作格对应的他动词结构中的宾语不可以。这是因为，如果我们用轻动词把两个他动结构放在一个树形图里就可以观察到，前者之所以可以是因为从底层 VP 主语位置提升到位置只跨越了一个节点即 VP，而后者的宾语不可以是因为从同一位置提升到同样位置必须跨越两个节点，VP 和 *v*P，这会引起违反下接条件。

【キーワード】 表層能格　深層能格　脱使役　反使役

1. 表層能格構文と深層能格構文

1.1 能格性

能格は通常、他動詞の目的語と自動詞の主語が同じ格で表示されることを指す。例えば、"John opened the door" の the door が受ける対格と自動詞構文 "The door opened" の the door が受ける主格が同一の格でなければならない。しかし、対格と主格は異なる格であるにもかかわらず、open は通常能格動詞として認識されている。その理由は高見健一・久野暲（2002）序章の関連部分を引用すると、「格は異なるものの、その（自動詞文の）主語と（他動詞文の）目的語は同一の要素が現れ、…、自動詞の主語と他動詞の目的語に同じ要素をとるという点で、能格性を示している」（(　) 内は筆者による補足）という。要するに能格を判断する基準は自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同一の要素か否かという点である。

(1) a. John broke the cup.
　　b. The cup broke.

(2) a. 中国队大败南朝鲜队。　中国チームは韓国チームを大きく下した。
　　b. 南朝鲜队大败。　韓国チームは大敗した。

(3) a. 太郎はドアを開けた。
　　b. ドアが開いた。

能格性はこのような自他両用の動詞の振る舞いを言う。そして、能格動詞は自他両用動詞のことを指す[1)]。

1.2 能格構文

能格構文は能格動詞を用いる自動詞構文のほうを指す。例えば次の例を見られたい。

(4) a. John rolled/sank/span the stone.

[1)] 日本語の場合は、開ける／開くはともに形態素 ak- を根幹に持つ。自動詞から他動詞へ、またその逆の派生過程に関する詳しい論証は影山太郎（1996、第四章）、影山太郎（2000、33-70 頁）をご参照下さい。

b. The stone rolled/sank/span. 能格構文

(5) a. 花子は紙を燃やした / 破った / ちぎった。

b. 紙が燃えた / やぶれた / ちぎれた。能格構文

(6) a. 互联网（的普及）方便了生活。

インターネット（の普及）の陰で生活が便利になった。

b. 生活方便了。　生活が便利になった。　能格構文

(7) a. 端正了态度。　態度、姿勢をただした。

b. 态度端正了。　態度、姿勢がきちんとなった。能格構文

1.3 深層能格構文、表層能格構文

Keyser&Roeper（1984）では英語における自動詞構文を中間構文（middle construction）と能格構文の二種に分けて考えている。

中間構文

(8) a. The bureaucrats bribe easily.　（これらの）官僚達は買収しやすい。

b. The floor paints easily.　（この）フロアは塗りやすい。

c. The book translates easily.　（この）本は訳しやすい。

d. The chickens kill easily.　（これらの）鶏は殺しやすい。

能格構文

(9) a. The ice melted.　氷が溶けた。

b. The door opened.　ドアが開いた。

c. The bone fractured.　骨が折れた。

d. The ball bounced.　ボールが跳ね返った。

一見にして、上のいずれも自動詞用法を示す文であるが、それぞれ異なるメカニズムにより得られる構造であると Keyser&Roeper は考えている。中間構文は本来他動詞の bribe, paint, translate, kill の外項が統語上に抑制され、目的語位置にある内項の部分が主語位置に繰り上がることにより形成される。これに対し、能格構文の(9)はレキシコン部門に、もとより内項を従える自動詞と内項、外項の両方を持つ所謂「自他両用動詞」の melt, open, fracture,bounce

が存在するため、移動の手続きを経ておらず、そのままの形で統語部門に表れると指摘している（382 頁）。即ち、Keyser&Roeper は二種の構文は述語動詞がレキシコンに持つ語彙情報によるものだと考えている。

この考え方を踏まえ、Lisa Cheng & James Huang（1994）は中国語の能格構文を表層能格構文と深層能格構文の二種に分けている。表層能格構文に用いる述語動詞は“踢破，推开，拉平，喊哑，说干，洗漏，骑累，唱哑，追累”等のように、本来他動詞的用法を備えている動詞が統語的操作により、対応する能格構文が生まれるという性格の動詞である。この統語的操作は上記で見られるように、他動詞、非能格動詞が必要とされる外項部分が統語上に抑制（suppress）され、内項位置に残る目的語が主語位置に繰り上げられるという手続きである。例えば、次の例をみてみたい。

(10)　a. 张三哭湿了手绢。　張三はハンカチを泣き濡らした[2)]。

　　b. 手绢哭湿了。　ハンカチは泣き濡れた。

(11)　a. 张三吹破了气球。　張三が風船を吹き破った。

　　b. 气球吹破了。　風船は吹き破った。

“哭湿”“吹破”は外項の表出が義務的（obligate）とされるため、(10) a、(11) a の例は外項にあたる“张三”が統語上に現れているケースであるが、b のほうはそれぞれ外項の部分が統語上に抑制され、内項に残留した目的語の“手绢”“气球”が主語位置に繰り上がることにより、形成された能格構文である。この統語的手続きを経た「派生」的能格構文は Cheng & Huang により「表層能格構文」と呼ばれている。

一方、深層能格構文に用いる述語動詞としては“醉倒，忙累，乐疯，吓坏，气死”等が挙げられ、例(9)にある英語の動詞と同じく、自他両用動詞であり、自動詞用法が担う構文は統語的移動の手段に頼らず、所謂 underlying ergative（本来の能格性）という意味で深層能格構文と両氏は呼んでいる。

[2)] 中国語の例文の日本語訳は原文の意味に即すようにあえて前項動詞 V1 と後項 V2 がくっつくような形で訳を加えている。本来日本語にない言語現象であるため、不自然に感じられるケースが多い。

(12) a. 张三醉倒了。　張三は酔っぱらって、倒れた。

b. 那杯酒醉倒了张三。　あのお酒は張三を酔っぱらわせ、倒れさせた。

(13) a. 张三忙累了。　張三は忙しすぎて、疲れた。

b. 工作忙累了张三。　仕事は張三を忙しくし、疲れさせた。

“醉倒”“忙累”は英語の melt, open, break のように、自・他を兼用する能格動詞であるが、a の例は Bruzio の用語では非対格動詞と呼ばれる動詞の使い方であるが、対する他動詞の使い方をする b は a を基本構造とした上に、外項にあたる“那杯酒”“工作”を付加させることにより形成された使役的構文である。

この部分は先行研究で扱う中国語にある二種の能格構文をみてみた。本稿が捉えようとするのは次の二点である。一点目は影山（1996）の「脱使役」化、「反使役」化の観点から、それぞれの異なる能格構文を説明できると主張する点である。もう一歩進んでいえば、中国語にも他動詞が自動詞化される過程で、英語、日本語と同様、この二種の操作が潜在していることである。二点目はそれぞれの能格構文が対応している他動詞構文（“张三哭湿了手绢”“那杯酒醉倒了张三”）を軽動詞 v を用いた VP シェル（*v*P）の構造内に統一的な説明を与えられる点である。

2. 脱使役化と反使役化

影山（1996）では、日・英語の他動詞が自動詞化される過程で、どちらも脱役化、反使役化の二種の操作が存在しているという指摘がなされている。

2.1 脱使役化

脱使役化：使役主を変化対象と別の物に置いたまま意味構造で抑制し、統語的には表出しないという操作。この操作は外項抑制の働きを持つ。

この定義に従えば、表層能格構文は他動詞に脱使役化が適応された結果だということが分がる。まず、使役主は統語上表出しないとのことだが、これは即ち、前に見た表層能格構文の生成メカニズムと同様である：表層能格構文

は他動詞構文の主語位置にある外項が抑制され、目的語位置にあった内項の繰り上げという移動の過程を経て得られる構造である。このことは表層能格構文が受け身を表す形態素“被”との共起関係で確かめられる。

(14) a. 手绢被哭湿了。　ハンカチは（誰かがなくことにより）泣き濡らされた。

b. 门被推开了。　ドアは（誰かに）押し開けられた。

c. 气球被吹破了。　風船は（誰かに）吹き破られた。

このように、受け身の形態素“被”が挿入されていても、元の文と極めて意味の類似する「置き換え」（パラフレーズ）になる。これは主語位置の項は本来、意味構造では theme という役割を持っているため、“被”の有無にかかわらず、文の合法性には影響が出ないためである。

次に、脱使役化された変化対象は自ずから状態変化が起きるのではなく、外部の力により変化が起きるという意味特徴から、「自ずから然る」という意味をもつ副詞“自然而然”と共起しにくいことが推測される。結果は予測の通りである。

(15) a. ×手绢自然而然地哭湿了。　×ハンカチは自然と（誰かに）泣きぬれた。

b. ×门自然而然地推开了。　×ドアは自然と（誰かに）押し開いた。

c. ×气球自然而然地吹破了。　×風船は自然と（誰かに）吹き破れた。

これに対し、反使役化により自動詞化された深層能格構文はここに挙げている句構造テストの面でちょうど逆の様相を呈する。

2.2　反使役化

反使役化：使役主を変化対象と同定することで自動詞化が実行される。

この定義により、深層能格構文に用いる自動詞は対応する他動詞が反使役化された結果であると捉えられる。「使役主を変化対象と同定する」とは意味上で変化対象が外部の力に頼らず、自ら状態変化が起きるという「内在的コントロール」の性質を持つことを含意する。“张三醉倒了”“张三乐疯了”等のように、変化対象“张三”は彼自身の「内在的コントロール」により、“醉

倒”“乐疯”との「変化が起きる」という点で脱使役の変化対象の「外部の力により変化が起きる」という特徴とははっきり異なっている。即ち、脱使役は変化対象と使役主を統語上別々に置いてあるのに対し、反使役は変化対象と使役主を同一物のように扱う。

まず、副詞の“自然而然”との許容で変化対象の「内在的コントロール」性が確認できる。

(16) a. 张三自然而然地忙坏了。　張三は自然と死ぬほど忙しくなった。

b. 张三自然而然地乐疯了。　張三は自然と有頂天になった。

c. 张三自然而然地吓坏了。　張三は自然と度肝を抜いた。

また変化対象は自ら状態変化の力をもつため、使役主の存在、外部の力による変化を示す“被”と共起しにくいことが想像できる。

(17) a. ×张三被忙坏了。　×張三は（誰かに）死ぬほど忙しくなった。

b. ×张三被乐疯了。　×張三は（誰かに）有頂天になった。

c. ×张三被吓坏了[3)]。　×張三は（誰かに）度肝を抜いた。

この節では、Cheng&Huang（1994）が提唱している二種の異なる能格構文は影山（1996）が用いる脱使役化、反使役化としてとらえることが可能な句的テストを示した。その結果、表層能格構文は他動詞の脱使役化が適応されることより得られた構造であり、深層能格構文は他動詞の反使役化された結果であることが了解出来るだろう。実際には、ここで提示しているテストのほか、両構文に対応する他動詞構文は以下の二点において異なる振る舞いを見せている。

(18) a. 手绢，张三哭湿了。　ハンカチ、張三は（それを）泣き濡らした。

---

3) 王玲玲、何元建（2003）、何元建（2011）によると、この文は構造上の曖昧性により、二義解釈がとれる中国語の多義解釈文である。“他故意吓了张三”“他无意中吓了张三”の二種異なる背景をに、前者が対応する能格構文は“张三（被故意）吓坏了”であり、後者に対応する能格構文は“张三（被无意中）吓坏了”であり、即ち主語“张三”は自ら“吓坏”の状態に化し、外部の力による変化ではないという解釈においては、使役主と変化対象が同一物である「反使役化」だと考えられる。この意味では受身形態素“被”更に“故意”とは相いれないことである。

b. 门，张三推开了。　ドア、張三は（それを）押し開けた。

c. 气球，张三吹破了。　風船、張三は（それを）吹き破った。

(19) a. ×张三，那杯酒醉倒了。　×張三、あのお酒は（彼を）を酔わせた。

b. ×张三，工作忙累了。　×張三、あの仕事は（彼を）死ぬほど忙しくさせた。

c. ×张三，李四吓坏了[4]。　×張三、李四は（彼を）びっくりさせた。

(20) a. 张三哭湿了的手绢。　張三が泣き濡らしハンカチ。

b. 张三推开了的门。　張三が押し開けたドア。

c. 张三吹破了的气球。　張三が吹き破った風船。

(21) a. ×那杯酒醉倒了的张三。　×あのお酒が酔いつぶれさせた張三。

b. ×工作忙坏了的张三。　×あの仕事が死ぬほど忙しくさせた張三。

c. ×李四吓坏了的张三。　×李四が度肝を抜かした張三。

表層能格構文に対応する他動詞構文における内項が主題化されうる（(18)）のに対し、深層能格構文に対応する他動詞構文の内項は主題化されにくい（(19)）。また、前者の内項は連体修飾節を従えることが可能（(20)）であるのに対し、後者のほうは連体修飾節を従えられない（(21)）。これは“张三哭湿了手绢”、“张三”と“手绢”がそれぞれ動詞の外項と内項とし、下位 VP 内部に位置することため、内項の“手绢”が話題文投射 CP の指定部に繰り上がるのには、VP という一つの節点を飛び越えれば実現可能となり、隣接条件に違反せずに移動が可能だからである。一方、“那杯酒醉倒了张三”は外項の“那杯酒”は原因項（Causer）という意味役割を持つ為、構造上は VP よりさらに一つ上の投射である VP シェル、即ち *v*P の指定部に位置しており、“张三”が CP の指定部に上がるには、下位 VP と *v*P の二つの節点を飛び越えなければならない。しかし、この移動は隣接の条件に違反することより、説明が出来る。次節では、表層能格構文、即ち脱使役化された能格構文が対

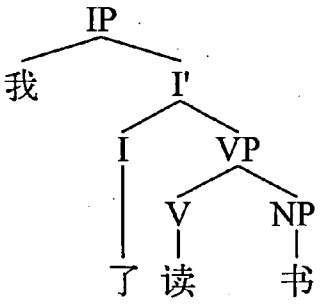
[4] 脚注 3 に示した二義解釈の内、この例は「“李四”の存在で“張三”が無意識のうちにびっくりした」との解釈をとる。従い、この意味での文は非文となる。例えば“树影下了我一跳”（樹木の陰が私をびっくりさせた）との文においては、“我”は主題化されるが許されない（× 我，树影吓了一跳）。

応する他動詞構文と深層能格構文、即ち反使役化された能格構文が対応する他動詞構文を軽動詞を用いる *v*P の構造内で統一的な説明を与えることにする。

3. 脱・反使役化が対応する他動詞構文

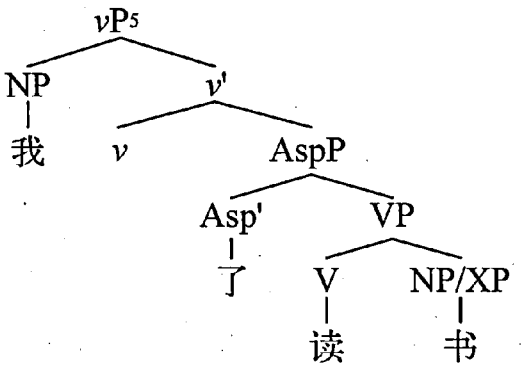
*v*P は GB 理論の IP と同様、文の最大投射のことである。最初の左枝分かれはこの最大投射の指定部（specifier）であり、この指定部が IP の指定部と異なるのは GB では IP の指定部はあるイベントの執行者（Doer）として扱っているが、MP では *v*P の指定部はあるイベントの原因項（Causer）として扱っている。例えば、“我读书了”は GB の考え方では以下の樹形図で表すことが可能である。

(22)



*v*P の考え方では次の樹形図で表せる。

(23)

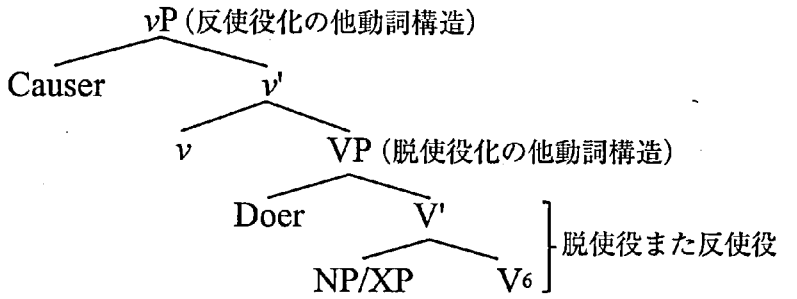


(22)の構造が表すイベントの解釈を平たく言うと、「私は読書という行為を実施した」のに対し、(22)は「私は読書という行為を引き起こした」という捉え方が出来る。

最大投射の *v*P の左枝分かれにあたるのは深層能格構文に対応する他動詞構文の主語位置に表れる成分（“那杯酒”“工作”“李四”）であり、下位 VP

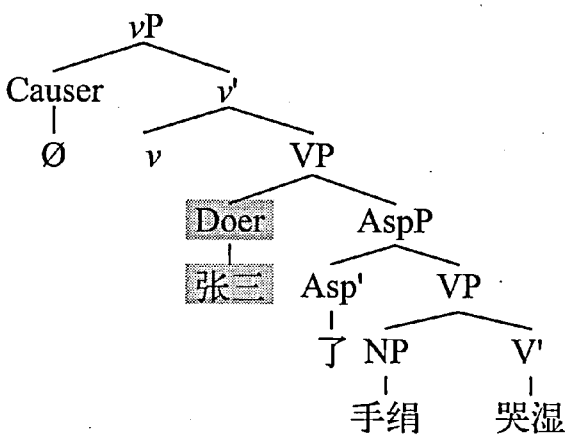
のD指定部のDoerは脱使役が対応する他動詞構文の主語（“张三”）である。そして、最下部にあるV'は脱使役、反使役による投射である。換言すれば、それは二種の異なる能格構文の構造を表す。

(23)



(23)に示すように、脱使役化が対応する他動詞構文では下位VPの指定部Doerの付加が行われるが、これに対し反使役化が対応する他動詞構文は最大投射のvP指定部のCauserの付加という操作に還元できる。例えば“手绢哭湿了”に対応する他動詞構文“张三哭湿手绢了”は“手绢哭湿了”にDoer“张三”が加えされることで形成される。これについては次の樹形図で表す。（影の部分は付加を示す）

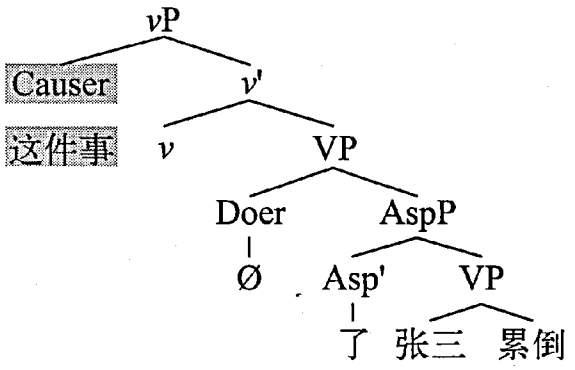
(23)



Baker（1988）、井上和子（1989）で提唱している要素間の「編入」により、接辞（ここではアスペクト接辞のAsp'“了”に該当する）に動詞投射主要部（ここでは下位VP投射主要部“哭湿”）を編入させることが義務付けられる。従って、“哭湿”は“了”への編入が行われ、“张三哭湿了手绢”が得られる。

これに対し、“张三累倒了”に原因項である“这件事”の付加は次の樹形図になる。

(24)



このように、二種の他動詞構文が同一の構造内に捉えられることは Cheng&Huang（1994）、影山（1996）の諸定義に従い、自然に導かれた結果である。

5. 結論

本稿は表層・深層能格構文の特徴をまず脱使役、反使役の観点から捉え、その結果、表層能格構文と脱使役と、また深層能格構文と反使役とそれぞれ極めて類似する特徴が共通することを察知し、これに加わり、各構文の他動詞構造について vP の考え方を盛り込ませることにより、同一構造内で異なる他動詞構造を説明することが出来ることを提示した。

参考文献

秋山淳、1998、「語彙概念構造と動補複合動詞」、『中国語学』246：32-41

安藤貞雄、小野隆啓、1993、『生成文法用語辞典』、大修館書店

Baker, Mark. C. 1988. Incorporation. The University Chicago Press, Chicago and London.

井上和子、1989、「主語の意味役割と格配列」、『日本語学の新展開』：79-101、くろしお出版

C-T. James Huang, 1988, "Wo Pǎo De Kuai AND Chinse Phrase Strcuture", copyright for James Huang's personal HP：274-311

C-T. James Huang, 1999, "Chinese Passives in Comparative Perspective", copyright for James Huang's personal HP：1-75

Gu, Yang, 1992, The syntax of resultative and causative compounds in Chinese, A Dissertation

Presented to the Faculty of the Graduate School of Cornell Universtiy

Keyser. S Jay & Thomas Roeper, 1984, "On the middle and ergative constructions in English", Linguistic Inquiry 15, 381-416

Lisa Lai-Chen Cheng & C. -T. James Huang, 1994, "On the Argument Structure of Resultative Compounds", In Honor of William S-Y. Wang, 187-221. Pyramid Press

Rint Sybesma, 1999, The Mandarin VP, Chapter 2：9-58, Kluwer Academic Publiers

申亜敏、2005、「中国語の自他と結果表現類型—日本語、英語との対照から—」、『レキシコンとフォーラム』（影山太郎　編）No.1：230-266、ひつじ書房

沈阳 /Rint Sybesma 2012、〈作格动词的性质和作格结构的构造〉、《世界汉语教学》第 26 卷 2012 年第 3 期：306-321、外语教育与研究出版社

Sze-Wing Tang, 1997, "The Parametric Approach to the Resultative Construction in Chinese and English", UCL Woring Paper in Linguistics3（Luther Chen-Sheng Liu and Kazue Takeda eds）：203-226

高見健一、久野暲、2002、『日英語の自動詞構文—生成文法分析の批判と機能的解析—』序章　研究社

山口直人、2016、『言語の科学—中国語からの視座』（語学教育フォーラム）31 号：140-152

山口直人、1998、「"在＋L" 構文の他動性について」『中国語学』245：165-174　日本中国語学会

熊仲儒、2014、《论元结构与汉语构式》、安徽师范大学出版社

Ya Fei Li, 1990b, "On V-V Compounds in Chinese", Natural Language and Linguistic Theory 8：177-207